

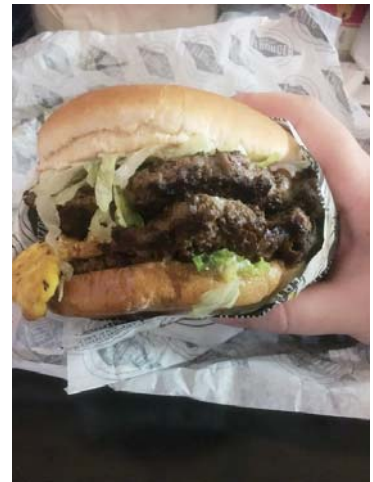
た。中でも僕のお勧めは、ファットバーガー。これぞ、アメリカ!と言わんばかりの、肉肉しいハンバーガー。成人男性の1日分のエネルギーを優に超えていそうなこのハンバーガーが、毎日の原動力であったことは間違いない。

3月末、僕は再びロサンゼルス国際空港にいた。カバンにたくさんの荷物とお土産と思い出を詰め込んで、3ヶ月前に飛び交っていた「× § & ¶ ! : || ⊙ ☞ ✨ > ✕」は、今や僕の口からこぼれるようになった。この3ヶ月を思い返しながらか、こぼれる涙を抑え、僕は日本への帰路についた。やっと日本に帰ることができるという安堵よりも忘れられない体験をおしむ気持ちで胸がいっぱいであった。今回の留学を通してたくさんのこ

とを学ぶことができ、研究だけではなく今後の人生の糧となるのは間違いないだろう。

3ヶ月の留学を経て戻った分子研は、かつて僕が見ていた分子研とは違って見えた。3ヶ月の間に分子研が変わってしまったのか? いや、そうではない。僕自身が変わったのだ。心も体も、僕はひと回り大きくなって、ここに帰ってきたのだ。留学の貴重な体験と友人とハンバーガーのおかげで。

最後に、今回の留学で大変お世話になったAgapie先生及びグループメンバーの皆様、正岡先生、大学院係や総研大基盤総括係の皆様、ADATI氏、アメリカで出会った全ての人とハンバーガーに深く感謝申し上げます。



FAT BURGERのXXLサイズ。これよりも大きなサイズもあったが、このサイズが一番幸せなボリュームではないかと思う。

覽古考新 15 | 1994年

私は長倉先生の弟子の末席を汚しているいわば不祥の弟子である。私の結婚式で、媒酌人の長倉先生そして井口先生などのどのスピーチにも私が秀才であるというお世辞がなかったぐらいで、秀才という言葉を書く最後のチャンスは私の葬式という事になる。もちろん、長倉研出身者の多くも秀才で、最近分子研に移られた私の同僚岩田末広氏は、慶応を見限って移られるという暴挙(?)からはそうは思えないが、すばらしい才能の持主であり、超秀才とでも賛辞を呈したい。そんな優秀な人材の集団の分子研が、創立時から「研究、研究……」と全員一丸となって突っ走った結果が現在の分子研の名声、世界の中のIMSにつながっている。考えてみると、これまでのわが国はすべてが「仕事、仕事……」であり、それが今日の経済大国日本を生んだわけで、これと同じ研究指向に文句を言われる筋はない。

.....

でも、やっぱりユニークな考えを持つ事、出来そうもないしかし重要なテーマに挑む事は研究を飛躍させる基本ではなからうか。本当の話なのかどうかは知らないが、理研の仁科研究室では入所した若い研究員にゲーテのファウストを渡し、一年程度はそれとテニスで過ごしたという伝説がある。その結果、湯川、朝永など、さらには日本医師会をリードした武見などの逸材を生み出した訳である。あまりにも早い科学技術の進展によって、現在の我々は科学に対する思想的対応に遅れをとっているような気がしてならない。その結果、現在の分子科学と、有機化学、生命科学、物質工学などとの接点には、分子科学者がもっと積極的にとびこまなくてはいけない問題が多々誕生しているのではなからうか。仁科研と同じわけにはいかないかもしれないが、分子研の若い有能な研究者も、分子科学の最先端に目を向けるだけでなく、今はじめれば新しい芽を生み出す本質的研究テーマを、分子科学以外の田畑から見つける事が必要におもえるし、それが分子研が分子科学の中心であるという意義でもあるのではなからうか。

分子研レターズ No.31「レターズ」(1994年)

茅 幸二 (慶應義塾大学理工学部教授)